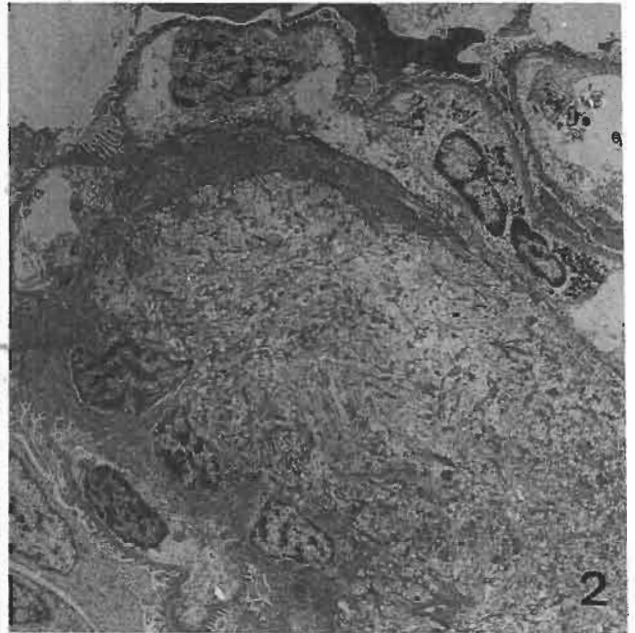
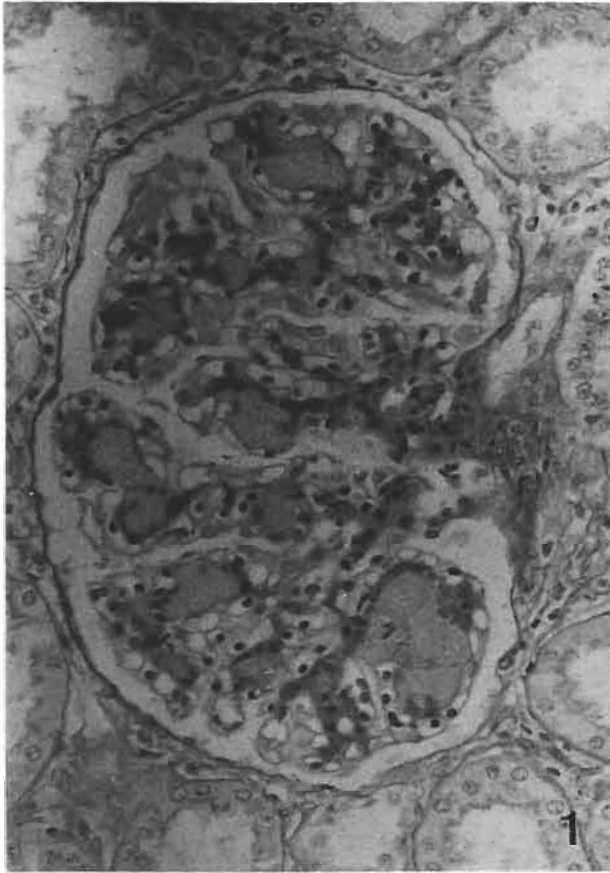


豚の腎臓

麻布大学獣医学部病理学第一講座・長崎県川棚食検出題 第32回獣医病理学研修会標本No.578



動物：豚，雑種，雌，6ヵ月齢。

臨床的事項：病歴不明，生体検査では異常を認めなかった。

肉眼所見：心臓，肺，肝臓に針頭大～小豆大の乳白色斑あるいは結節が認められ，中心部が乾酪化しているものもあった。気管気管支リンパ節は腫大し，腸間膜リンパ節には粟粒大の乾酪結節を認めた。これら諸臓器・リンパ節の病変は組織学的に肉芽腫性炎で，*Mycobacterium fortuitum*が分離された。腎臓の表面と断面には乳白色微小結節が散在していた。

組織所見：殆どの糸球体のメサンギウムに，弱好酸性均一ないし細線維状物質の結節状沈着が認められた（写真1：PAS， $\times 290$ ）。沈着物質はアミロイド染色陰性，PAS弱陽性で，Azan染色では青染し，細線維構造が明らかな部分もあった。ほぼ全ての糸球体にメサンギウム細胞（Mes細胞）の増殖が認められたが，沈着物質の存在するメサンギウムにおいては，それら細胞は辺縁に圧排されていた。間質には軽度線維化と濾胞形成を伴うリンパ球浸潤が見られたが，特に荒廃した糸球体周囲にはリンパ球の集

簇が著明であった。電顕的に沈着物質は細線維状で，メサンギウムに存在していたが，メサンギウム基質とは明らかに異なり，タンニン酸-酢酸ウラン二重染色を行ったところ，細線維は約 600 \AA 周期の横紋を持ち膠原細線維であることが確認された（写真2： $\times 2,200$ ，写真3： $\times 32,000$ ）。細線維の幅は均一でなく，その横断面も著しく不整で，走行も不規則であった。

考察：本例の腎糸球体病変の特徴はメサンギウムにおける膠原線維の多量の出現である。本来，正常な糸球体に存在するコラーゲンはIV型コラーゲンで，細線維を形成するフィブリルコラーゲンは存在しないが，培養Mes細胞はIV型コラーゲンのみならずI及びIII型コラーゲンを産生することが証明されている。本例ではなんらかの原因によりMes細胞によるフィブリルコラーゲン産生が惹起されたと考えられ，最近人の新しい糸球体疾患として提唱された“Collagenofibrotic glomerulopathy”の範疇に属する疾患と考えられた。

診断：豚の原発性糸球体線維症